

留学・研究計画書

氏 名 加藤 裕美	留学機関名 マレーシア・サラワク大学 東アジア研究所
留学先国名 マレーシア連邦	留学期間 西暦 2007 年 10 月 ~ 2008 年 10 月
研究テーマ 森林破壊によるマレーシア狩猟採集民社会の再編	
研究テーマの説明 (テーマの学術的・社会的意義についても記載してください)	
<p>本研究の目的は、マレーシアにおける森林伐採の展開が森に依拠して暮らす狩猟採集民社会に及ぼしたインパクトを人類学的視点から実証的データにもとづいて明らかにすることにある。具体的には、フィールドワークをおこなうことで伐採の展開によって定住化を余儀なくされた人々の社会生活と経済活動の変化と再編成の過程について詳細な民族誌的データを蓄積するとともに、図書館及び博物館で公刊・未公刊の文書資料を網羅的かつ体系的に収集し、分析する。</p> <p>マレーシア・サラワク州においては、1970年代後半から大規模な伐採により森林の大部分が消失した。こうした状況は海外 NGO の注目を集め、狩猟採集民社会の急激な変化と貧困が問題視されてきた。NGO による報告や研究の多くは国家権力によって権利を侵害された人々の苦悩する困難な状況が強調されすぎたきらいがあり、急激に変化する状況を受けいれ、自らを適応させていく狩猟採集民社会の姿はほとんど語られてこなかった。</p> <p>申請者は、これまで森林破壊の影響を受けた狩猟採集民社会を対象に、従来の生業である狩猟採集活動を持続し、森の産物の商品交換を介して市場経済に適応していく過程を描きだすことに努めてきた。調査対象はサラワク州に居住するシハン人である。2004年5月から2006年8月までのあいだ何度か調査地を訪れ、主に生業活動、食事内容、生計に関する調査をおこない、これら3項目のいずれにおいても狩猟採集活動が依然として重要な役割を果たしているとの結論をえた。この研究成果は申請者の修士論文にまとめ、8つの国内外の学会で発表を行ってきた。</p> <p>これまでの研究では生態人類学的な分析手法をもちい、上記のような調査項目に関する数量的データを提示することで狩猟採集活動の持続的な重要性を示してきた。しかし、こうした手法は、定住化後も続けられている狩猟採集活動と市場経済への柔軟な適応がどのような文化的装置や社会的ネットワークの援用、改変、置換、再解釈等によって可能になっているのかといった問題設定にはアプローチしがたい。京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科への転研究科を機に、以前から強い関心をもっていた上記のような問題設定にもとづき、これまでの研究成果を放棄するのではなく、より大きく纏めあげるために、サラワク州のシハン人の村と州都クチン等での合計1年弱の現地調査を切望している。</p> <p>従来、「脆弱」な狩猟採集民社会は外部社会と接触することで従属的な立場に追いやられたり、民族消滅の危機にさらされるといった数多くの報告がなされてきた。しかし、さまざまなアクターが複雑に作用する、変化の激しい状況においてもなお、独自の生活世界を維持しつづける狩猟採集民社会の具体的な事例を提示するものとして、本研究は、ポスト狩猟採集民社会の人類学研究に大きく寄与できるものと考えている。</p>	